

“安全”という言葉

向殿 政男

1. 安全の起源

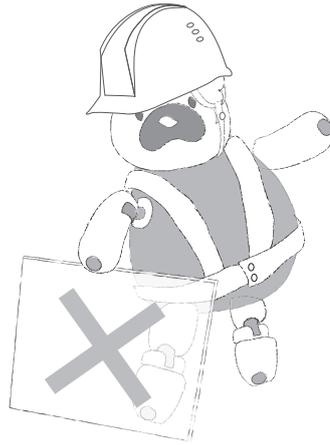
私には、長い間、疑問であった。“安全”という言葉は、日本オリジナルなのか、それとも中国から入ってきた言葉なのかについてである。科学や哲学のように明治時代に新しく創られた言葉であることがはっきりしていれば、我が国オリジナルであると胸を張って言えようが、「安全祈願」のように、大昔から我が国では使われていたので、そう簡単には決められない。たぶん、中国から入ってきたもので元々は漢語であろうとは想像をしていたが、知り合いの中国人に聞いても、日本から入ってきたのか中国起源なのか、知らないという。ところが、先日、知人から『産業安全活動 二つの源流』¹⁾という書籍を贈呈され、この中に筆者の長年の疑問の答えがあった。この書籍には、日本の産業安全の先駆者であり、小田川全之や蒲生俊文と共に安全第一という言葉が我が国に広げた内田嘉吉の著書『安全第一』²⁾の現代語訳が記載されていて、その中に、安全の語源という章があることに気がついた。そこには、こう書いてあった。“「孝経」に「上に安じ、下に全うするは、礼より善きはなし」という語がある。この意味は、

上は陛下に対して奉り、下は万民に向かい、至誠を尽くして天下の安全をおしと訓えたものである。「安全」という言葉は、これから起こったのである。”と記されていたのである。「孝経」とは孔子の言葉を記したものであるから、紀元前の書物であり、2500年ぐらい前の話である。安全は実に古い起源をもつ中国の言葉であることを知って、長い間の疑問が解けた次第である。

2. 日本での安全

我が国では、古くから安全と神社は深く関わってきたように思われる。私などでも、暮れや正月になると、毎年のように、しおらしく神社にお参りに行くのであるが、境内には絵馬がたくさん掛かっている。その中には合格祈願などと共に必ず“家内安全”という伝統的なものが含まれている。ここでの安全とは何を意味しているのだろうか。家族全員が、今年も元気で、病気もせず、事故にも遭わずに、また仲たがいもせず、仲良く過ごせますようにとの祈願であろう。この場合の安全は、究極は自分自身を含んだ家族の健康維持と予期せぬ傷害や災難から逃れることであり、守るべ

きものは身体、ひいては人命であろう。“交通安全”の祈願となるともつと明快である。交通事故に遭いませぬように遭わせませぬように、そして、たとえ遭っても遭わしても怪我をしませぬように、怪我をしても死ぬようなことはありませんように、との願いであり、守るべきものは究極は人命である。神頼みといっても、何もせずに神に頼むのではないだろう。自分自身もできるだけ努力をするが、それでも何が起きるかわからないし、うまく行かないことがあるだろうから、その時にはどうぞよろしくお守りください、という意味を込めているに違いない。この点、“海上安全”の祈願となると更に明確である。海上安全に特化した神社は港のあるところ、日本中に点在する。漁師が船を海原に漕ぎ出すとき、相手は自然現象であり、人知の及ばないところがある。何が起きるかわからない。神に祈るしかないところがどうしても残る。その時、命を守るための自然と人間の知恵と肉体の戦い、現代でいえば、さらには技術と管理も含めた戦いが大前提であり、その後の神頼みである。何もしなければ安全であるという人がいるが、これはあまり意味がないだ



ろう。一時しのぎの安全は、これでもよいかもしれないが、何かを求めて、挑戦して、そこには危険性（いわゆるリスク）が存在して、事故に至らないように懸命に努力をして安全を確保し、それでも努力が足りないときも、ある時には未知のことも、また不可抗力のこともあることを覚悟しなければならない。だからその時にこそ、神に祈る、神頼みにするという関係が本来だろう。我が国の原子力発電所や鉄道事業者のように人命を預かる企業には、必ず神棚がある。人知を尽くして安全を確保することを神に誓い、それでも何が起こるかかわからないので無事を神に祈願するという真摯で、謙虚な姿勢がそこには表れている。ただし、マスコミ的には、最後は神頼みか？などと揶揄される可能性があり、報道陣等にはあまり見せたり写真を撮らせたりしたくない気分だろう。企業自身の精神や自分自身の心の在り方の問題なのだから。

3. 安全の本質

安全の意味するところ、分野や立場によっていろいろな考え方があり得るだろうが、基本的には、安全には、積極的に何かを求めて、危害が

及ばないように懸命に努力をして、それでも完璧な安全はあり得ないだろうことを覚悟する、といった要因が含まれている。安全の、本質はここにあり、安全とは本来、前向きでポジティブな概念であると考えられる。私たちが考えがちな、何もしなければ安全だ、誰かが安全を守ってくれるはずだ、絶対に安全でなければ認めない、というような発想は、安全の本来からいったら、間違っていると云わざるを得ない。

4. 講演でのこと

私の講演で次のような話を時々紹介することがある。“安全の意味を理解するには、それを構成している漢字の語源に戻ればよい。安全の「安」という字は、ウかんむりは家を意味していて、家の中で女性が安心して生活をしていることを表している。安全の「全」という字は、山形のかんむりはお城を表していて、お城の中で王様が自分の領地の人民は無事に生活しているかを確認していることを表している。これが安全の意味であって、ボトムアップに下からの、そしてトップダウンに上からの両方の視点があって、初めて安全といえる”という話である。この

話、最初に紹介をした「孝経」に書かれている安全の起源「上に安じ、下に全うするは、礼より善きはなし」と同じ形になっていることに気がつく。偶然の一致か、それとも必然か。答えは、偶然ではあるが、必然ではないのである。なぜならば、私の話には嘘が混じっていて注意をしなければならない。「安」の字の語源はほぼ合っているが、「全」の字の語源は、全然正しくない。全くの嘘だからである。もっともらしいが、この話を人にするときには、気をつけて欲しい。この冗談を講演で時々話をしていたが、最近、上の「孝経」の安全の語源を知ったとき、この偶然に私自身驚いている次第である。

¹⁾ 特定非営利活動法人リスクセンス研究会編著(2016)：産業安全活動 二つの源流「Think Safety First again」—100年の時空を超えて—, 化学工学日報社

²⁾ 内田嘉吉(1917)：安全第一, 丁未出版社

[明治大学名誉教授]